

24 「成人吃音相談外来」の開設と経過

国立障害者リハビリテーションセンター

病院リハビリテーション部言語聴覚療法¹、病院耳鼻咽喉科²、
研究所感覚機能系障害研究部³、学院言語聴覚学科⁴

餅田亜希子¹、森 浩一^{2,3}、坂田善政^{1,3,4}

【はじめに】吃音に関する研究は近年確実に進んできているものの、本邦においては諸外国に比べ、吃音に関する基礎研究や臨床研究は質、量ともに不足している。また、成果をあげている治療・訓練アプローチは存在するものの、本邦において、吃音に関して高い専門性を有する臨床家は数少なく、治療を希望して医療機関を訪れても、適切な治療を受けられない場合が少なくない。

このように、相談・治療のニーズがあるにも関わらず、全国的に十分な支援が提供されているとは言いがたい吃音に対して、当センター病院では古くから相談・治療を行ってきた。現在でも当院には日本各地から吃音に関する多くの相談が寄せられ、国内の遠方からも治療を求めて来院する患者がいる。当院言語外来の新患の半数以上を吃音の患者が占め、予約から診察まで数ヶ月待つ必要がある状態が続いていた状況を受け、病院では本年6月、本邦初と考えられる、成人吃音に関する専門外来である「成人吃音相談外来」（担当医は森、評価・訓練を担当する言語聴覚士は餅田と坂田）を開設するに至ったので、その経過を報告する。

【方法】平成23年6月6日の外来開設から10月31日までの間に、「吃音」を主訴に成人吃音相談外来を受診した患者について、性別、年齢、居住地、社会的背景などの基本情報および、吃音の重症度、初期方針、訓練経過について分析した。

【結果】①平成23年6月6日から10月31日までに、「吃音」を主訴に成人吃音相談外来を受診した患者は計26名であった。②性別は、男性22名、女性4名であった。③年齢は、平均26.9歳（範囲20～41歳、中央値26.5歳）であった。④居住地は、埼玉県10名、東京都9名、神奈川県2名、茨城県・栃木県・千葉県・大阪府・熊本県各1名であった。⑤社会的背景は、会社員・公務員10名、大学生7名、パート4名、無職3名、自営業・主婦各1名であった。⑥吃音検査法の「モノログ」における吃音の言語症状の重症度は、9段階評価（1＝吃症状なし～9＝最重度の吃音）で平均3.96（範囲1～9、中央値3.5）であった。また、吃音の重症度の診断においてもひとつの重要な指標である心理面については、改訂版エリクソンS-24コミュニケーション態度調査票（24点満点：得点が多いほどコミュニケーションに対して否定的な感情を持つ）で平均17.5点（範囲4～23、中央値15）であった。⑦外来における初回評価後に訓練を開始したのは16名で、そのうち3名は約3ヶ月の訓練で吃音症状が軽快し、訓練終了に至っている。

【考察】1）成人吃音相談外来は開設当初より予約の申し込みが多く、現在、予約から初診まで3ヶ月程度は待つ必要がある状態である。比較的遠隔の県に居住している患者も来院しており、本邦における成人吃音の相談機関が不足していることが推測される。2）初診後、訓練を開始した患者のうち、吃音の症状が改善し終了に至ったケースに共通していたのは、①訓練開始当初、一定期間はある程度高頻度の通院が可能、②STから課された、家庭や日常生活における宿題の実行状況が良好、といった条件であった。3）吃音に関する専門外来を有する当センターは、全国の吃音児者の福祉のために、基礎研究と臨床研究、専門家の養成を推進し、地域連携モデルを構築していくべき立場にあると考える。